

新刊批評

山本勝市著

「計劃經濟の根本問題」

手塚壽郎

「思想」を憂へる必要は、國家も人も總力を擧げてゐる事變下の今に於ては、毛頭あり得ない。また如何に事變が長期に互るに至るであらうとも、また歐洲大戰の終末期に於ける獨逸の如き例があるとしても、ひとり我國に限つては、何時如何なる場合にも思想の危機を憂へる必要はあり得ない。だが「思想」が國家及び人の運動の根本的推進力であることを知つてゐる吾々は、「思想」問題に就いて眞實に杞人の憂を憂へて置くことさへも極めて重要である。事變の長引くときの人心の間隙をねらつて、又は事變の後に來ることある

べき人心の緩みをねらつて、赤化思想の攻撃來襲が無いとも限らない。赤化思想の痕跡すらも跡絶えてゐる今ではあるが、杞人の憂を憂へつゝ萬全の對策を樹立することは必ずやなされねばならない。

ところで「思想問題」の對策としては、日本主義思想の積極的建設こそ、缺くべからざる第一のネッセンチであるのは言を俟たないが、同時の諸種の危険思想、就中赤化思想の徹底的批判も忽にすべからざるものである。人は今統制經濟を謳歌しつゝ資本主義を批判するのであるが、此批判の内容はマルキシズムの資本主義批判其のものでしかない。統制經濟を謳歌する人々は一度立歸つて資本主義に對する自らの批判を再吟味する必要があると同時に、マルキシズムを再吟味して見る必要があらう。此らの再吟味をなした上で新なる理論的基礎の上に統制經濟の樹立が行はれねばなるまい。

マルキシズムの再吟味は、種々なる面からなされ得る。或ひは其哲學的基礎の面から、或ひは其經濟の面から、同じく經濟の面からにしても、主として資本主義批判の面からなされ得るであらうし、或ひは資本主

義に代つて現はるゝところの經濟の新形態の面から、なされ得るであらう。此最後の面からのマルキシズムの吟味は、ロシア革命が一應歸結すべき所に落ちつくまでは、必ずしも活潑になされなかつた。周知の如くマルキシストは、科學的社會主義の名の下に、資本主義社會の後に來るべき社會について、何らかの記述をなすことさへも拒否してゐたのであつた。けれどもロシア革命が其國の資本主義を打ち倒して見れば、理論的要求が如何であらうとも、具體的にロシアそれ自體を組織し直さねばならなかつた。

具體的にロシアを組織し直すと云ふことになつて見れば、經濟の面に於て、經濟計算を如何にするか、不可避的に解決を迫つて來る。此解決の如何によつてはロシアの所謂共產主義は其本質を失ふことにもなるわけであつて、經濟計算の問題はロシアにとつては重大な問題である。また共產主義を批判する者にとつても否應なしに事實の必然に迫られて解決された共產主義の此建設的面に攻撃を加へ得ることは、極めて効果的である。此事情に促されて歐洲大戰の直後から、共產主義社會に於ける經濟計算の問題が經濟學上の重要な

問題となりつゝある。

國民精神文化研究所員山本勝市氏は、此問題の重要性を既に十數年前に認識し、其研究の成果を昭和七年「經濟計算」として公刊してゐる。然し「經濟計算」なる名辭が世人に充分にポピュラーになつてゐなかつたり、書物の形が「經濟計算」の如き問題を盛るにふさはしくなかつたり、それに加へて數頁にわたる落頁が何れの *exemplaire* にもあつたりして、書物の賣行は私の知る所ではないが、著作の目的としてねらつたものが充分に達せられたか否かを私は疑つてゐる。今此著者は此「經濟計算」に多大の修正を加へて「計劃經濟の根本問題——經濟計算の可能性に關する吟味」として出版した。然し此書名の變化に拘らず、著者が目的としてゐる所のものは、共產主義社會に於ける經濟計算の批判であり、これを通しての共產主義の建設面の批判である。著者は此ことを十八頁に明示してゐる。「本書の問題とする所は社會主義計劃經濟制度の下に於ける經濟計算の吟味である。すなはち計劃經濟をとるところの社會主義制度のもとにあつても、經濟計算が他の組織の下に於けると同様必要不可欠なる所以

を論證し、更に此の必要不可欠なる經濟計算が、その制度のもとに於て實行可能なりや否やを吟味することである。だが一國の生産總資源の經濟的配分を實現して、國民生活の諸需要と其の充足との持續的調和を形成して行くがために、經濟計算が必要不可欠であることをすでに了解せる吾々にとつては、社會主義的經濟計算の可能性如何の問題は、じつは社會主義經濟そのものゝ存立の可能性如何を決すべき重大問題なのであり、かくして社會主義の主張に對する批判は、種々な角度から可能であるとしても、經濟計算の可能性如何の方面からの批判こそは、最も其の核心を突くものであることが明であらう。」

著者はかやうに目的たる問題を設定したる後、第二章では、此問題が學說史の上で如何に提起されたかを叙述する。著者によれば、此問題の提起はカール・ピエルソンの「社會主義社會に於ける價值問題」によつて正確になされたと云ふ(五六頁)。此問題提起と否定的解答に二年後れて、ブールガンが同じく此價值問題の否定的解答をなした。此時代から問題は徐々に、たゞロシア革命が勃發してから、殊に最近數年來活潑に發

展しつゝあることが説明される。これまでが第一編を成してゐる。第二編は諸理論の批判で、第三章から七章までから成る。第三章は實物による計算の主張と批判を内容とする。第四章は労働を尺度として計算せんとする主張の叙述と批判、第五章は貨幣價值によりて計算せんとする主張の叙述と批判、第六章は合理的經濟計算を不可能とするミーゼスの見解の叙述の裏書であり、第七章は競争導入による問題解決の試み即ち最近の學說の叙述と批判とである。第三編は經驗の吟味と顯せられ、ソ聯が結局社會主義的經濟計算を實行し得なかつたことの叙述に充てられてゐる。紹介者はこゝで、著者の批判の内容を詳述して行くことが出來ない。數言に要約して云ふならば、著者は、(一)實物計算による問題の解決は自足經濟の如く狭小な經濟に非る現代の經濟に於ては全く不可能であること、(二)投下労働價值と云ふが如き絶對的價值を以てしては、財貨の生産と消費が適し得ないこと、(三)貨幣による經濟計算は本質上財貨の自由なる需供によつて成立する價格の存在を意味するのであるが、生産手段の國有になつてゐる社會主義社會では實は貨幣による計算が行はれる

のでなくして、全く經濟計算は中央權力の恣意によつてなされることを歸結として提出する。

× × ×

著者の新著は舊著に加へるのに、舊著以後に於て特に英米の學界に於て發展した論争と業績との研究を以てし、愈完璧なものとなつて來た。世界各國の少壯學者の經濟計算に對する研究の業績も、過去の諸大家の業績も、exhaustiveなる點に於て、到底山本氏の新著——否舊著でも同じことであるが——に比肩し得るものではない。山本氏は、ロシアに於ける此問題に關する文献を特に多大の私費を投じて例へばブルックスの如きに獨譯せしめて、それらを研究せられてゐるのであつて、英米佛の最近の少壯學者と雖もそれほどまでの熱心な研究はしてゐない。紹介者は、山本氏の著作は同じ問題を論じた世界の書物中最も詳密を極むる第一位にあるものだ、と、赤面することなく言ふことが出来る。

山本氏はミーゼスの見解を批判する所で次のやうに云つてゐるが、これを實は其まゝ私から山本氏を批判する言葉としたいのである。「さてミーゼスの見解に對

する批判をなすべき順序に達したが、實は私はミーゼスの見解を是認するのである。といふよりも是認せざるを得ないといふのが正當であらう。生産手段の私的占有制が排除せられた社會に於ては、生産財の價值が客觀的に成立しない。客觀的に成立する價值なくしては、貨幣計算は適用するを得ず、合理的經濟計算はその基礎を失ふが故に不可能に陥り、生産は任意放恣となると云ふ論理そのものには、異論を挟む餘地はないと考へる……尤も私がミーゼス教授の『經濟計算』の論理を全面的に承服するといふことを以て、私が教授の經濟學や世界觀人生觀に對して承服するものと誤解されてはならない。」(二五五頁)それのみではない。山本氏の述べてゐる經濟計算の問題の歴史に對しては私は可成りの不満足をもつ。もとより山本氏のねらつてゐる目的は、こんな所にあるのではないことは云ふまでもないのであるが、あれほどまで纏つてゐる著作に於て、誰しもが直ちに氣付くであらう事實の敘述に多少の落ちのあるのは、目ざはりである。即ち私の知る限りでは投下労働時間を以て經濟計算を社會主義社會に於て行はふとする試みを記述したものは Schättele の

Quintessence (1874)である。舊著「經濟計算」ではこれが述べられてゐ乍ら、新著ではそれが省かれてゐる。Schaffle はマルキシストではないが、マルクスに於てあり得るであらう經濟計算を叙述してゐる。所でこのやうな經濟計算は、所有權の認められる社會に於てさへ試験されたのであつた。Owen がなせる試験がそれである。故に私に云はしむれば、經濟計算の學說の歴史は Auncy の青年時代の學位論文で研究されてゐる Les systèmes socialistes d'échange から始めらるべきものであらうと思ふ。(此書物は一九〇八年に出版され、プーランの影響を多分に受けてゐる。Dollans の青年時代の著作 Robert Owen も注目されねばならぬ) 山本氏は社會主義社會の經濟計算を論ぜられるので、他の經濟計算を論ずる必要もないわけであるが、然し問題は Les systèmes socialistes d'échange と不可離な關係で發展して來たのである。

所でシェフレの著作に刺激されて Jaurès が一八九五年の Revue socialiste に書いたものが、社會主義社會の經濟計算を叙述したものととして佛蘭西では知られてゐるが、私は未だ讀んでゐない。Kautsky, Am Tage

山本勝市著「計劃經濟の根本問題」(手塚)

nach Revolution にも同様の記述があると云ふ。(Auncy, Les systèmes socialistes, p. 88 note) これらにも況して山本氏は Georges Renard (現在同名の法學者があるが、全く別な人である) の Régime socialiste を忘れてゐる。山本氏はプーランを讀んで居られる筈であるから、この書物を忘れるのは如何なる譯か。これは、フランスでは社會主義者も此批難者もよく讀んだ本であつて、三年程前八版位になつた筈である。ピルーが云つてゐるやうに、フランス人は社會主義社會が現在の資本主義社會に優つてゐる點を明らかにしなければ、此主義に向つて歩むやうなことはなさない。これがためにフランスでは社會主義者が經濟計算のことを論じた場合が多い。プーランの名著はかゝる地盤の上に生れてゐる。Auncy の前掲書第一章 Owenisme et collectivisme も簡單ではあるが、問題史に載せられてよい。數年前流行して解説された絶対價値を求むるテクノクラシーも問題史の中に含められるべきではなかつたか。次に「經濟計算」の不可能と云ふことを山本氏は屢云はれるのであるが、私から見れば、どの方法の經濟計算でもなして、なせぬことはない。この場合は生産

と消費との自由が全く停止されて、自由が微塵だもなくなるだけのことである。今もし社會主義者がねらつてゐるものを正義と名付ければ、結局人には自由を選びとるか、正義を選びとるかか二途しかない。正義を選ぶは、即ち社會主義的經濟計算を行へば自由が無くなるだけである。山本氏も舊著では私と同じやうなことを云つてゐたと記憶するが、新著では如何なる理由でか、此記述が取り去られたやうである。私は或とき教員の講習會で此結論を提出した所、誤解も生じた。教育的効果から云へば新著のやうにすることが有益であると思はれるが、書物には *alternatives* が明瞭に書かれてよいと思ふ。

こゝに指摘したことかきは、新著の優秀さを少しでも傷くるものではない。優秀なるうちにも、第一章の第二、三節は最も大膽に資本主義謳歌者としての著者の態度を表明したものであつて、私は百年の知己を得た感を深くする。現今の統制經濟論者は資本主義批判の武器としてマルキシズム、詳しく云へばヒルファディングの金融資本論あたりを用ひてゐるのでは無からうか。かくの如きは重大な悲しむべき事柄である。

獨占現象に對しても著者が敢然として資本主義謳歌者としての解釋を下して居られるのは、敬服に値する。たゞ此點の叙述は稍簡略であるから、其展開こそ望ましい。斷つて置くが著者を私がかやうに解釋したとしても、著者が戦争下に於ても反統制主義者であると信じてゐるのではない。資本主義の運行に必要な時間を、戦時には待つてゐることが出来ない。戦時に於ける統制經濟なり計畫經濟なりは、平時の經濟と分離して考へねばならぬし、充分な理由をもつ。

(理想社、オクダウオ、本文五四二頁 四・〇〇)